

## 科研費・基盤研究A

「天文学との連携にもとづく考古学・考古史学研究法の構築」(19H00544)

### 「日本固有の星名に関するフィールド調査・瀬戸内沿岸（山口・広島・岡山）地域」の 研究成果報告書

古屋 昌美

#### はじめに：瀬戸内（岡山・山口）で確認された「日本固有の星名」に関する調査について

日本では古来より、天体に関する認識により形成された星名（和名）が各地域で語り伝えられている。伝承は夜間、海に出ることの多かった漁師により残されたものが多いが、瀬戸内海沿岸地域は夜間においても漁に出ることが可能という特徴を持っている。今回は

- ・ 山口県防府市野島
- ・ 岡山県岡山市南区小串
- ・ 岡山県倉敷市下津井 を訪問し、伝えられている伝承の調査とデジタル機器による口承等の記録を目的とした。なお、この調査は北尾浩一氏と共におこなった。

#### 1・山口県防府市野島

北尾氏が2012年に調査をおこなった際、不在であった野島の「くどき（当地に伝わる盆踊りでの里謡）」の伝承者（昭和7年生まれ、野島出身）を訪ね、星を歌った俚謡の映像および音声の記録を行なった。

（写真：野島漁港の様子）



#### スマルがうたわれた俚謡

話者A氏に「くどき」を歌ってもらう。

「♪ちよいと言うてみましょ 音頭出したが やしごよ たのま

天はひろいのに すばるぼしや ごじょごじょ 海はひろい…間違えました

ごめんなさい…海はふかいのにエビのこしやまがる…ってその繰り返しです。

それから、あの、そのまから言葉がすんだら本題にはいるんですね。あの、たとえば

「すずきもんど」とか忠臣蔵とか、忠臣蔵の文句をちょっとやってみましょか？」

引き続きA氏に歌ってもらう。

「♪あ————、音頭、ちよいと言うてみましょ 音頭だしたがなんどいうたものか

天はひろいのに すばるぼしやごじょごじょ 海はふかいのにエビのこしやまがる

これは音頭のまからなことば されば これから 文句にかかる

受けし恵みは山よりたかく 鳥の毛よりも我が身は軽し 雪も恨みも積もりしやうち

主の敵をうちかえしたる 今に 忠義の名もたかなわの むかしょかたらん

いざ聞きたまえ…これから私流の字余り音頭がはいります」

7年前に北尾氏が調査を実施したときにA氏は不在だったが、B氏より「家は広いのにとっととつかはごじょごじょ」を含めた口説きを採取されていた。A氏の口説きには、その箇所はないことを確認、歌い手によって謡う内容は多様に変化することもA氏より伺った。

A「そういう文句もわたしの若い頃に島の古老が口説くのを聞いたことはある。

節も、わたしの節より他の方が口説く節も結構違うのがあります。基本はああいう風になっておりますけれども口説く御方によってずいぶんいろいろ節は変わる」

### 北極星…動かぬ「根」の星

歌う以外にも島の古老は星のことを「スマル」以外で話していたか、北尾氏が問うと

A「北極星のことをネノホシと。かわらないからネノホシという。あれを中心に地球はまわるので、あれは朝から晩まで…日が暮れてから夜が明けるまで変わらないだからネノホシ…根本の星（根の星）。木の根の根です。あれを根本に地球はまわるんだと。学はないなりに、昔の島の漁師はころえていた」

北極星のことを子の星と、十二支で表現する和名は広く伝えられているが、ここでは木の根のように動かない＝根の星という伝承が伝わっていた。他の地域でも見られる、伝承の過程での変化の中でも合理的なものと考えられる。（→「子の星」「根の星」「寝の星」）

A氏は大分県姫島からの帰りにネノホシを目当てにしたことを語られた。

A「漁場に行くときには明るいうちに…午後3時頃に姫島へむかって。明るいうちは姫島がみえますので。星もなにもたよりにしなくていい。そのかわり（中略）帰るときには羅針機もコンパスもなにもないから、ネノホシに向かって（帰る）。そういう風なやりかたで。北極星に向けて帰ればだいたいこの島にたどり着く」

北尾氏が南側の星についての記憶はないか問われたが、島へ帰る＝北へ帰るということがほとんどのため、記憶にないとのことだった。

### カセボシについて

ネノホシはおじいさんから？と北尾氏が問うと島の古老より、とA氏。明治元年生まれだったとのこと。A氏の父は明治25年生まれ。ここでカセボシの名を聞く。

A「この頃有名なオリオン星座をうちのほうでは、かせぼしと言った。」

K（北尾氏、以降K）「（玄関にあった漁具を指さして）これ、カセですよ。」

A「うちではヤマカケというんです。かけるから。」

K「カセボシは3つの星？3つ並んでいる？」

A「そうそう、あれをカセ…水のはいるところがおおきくてもつところが小さくて」  
古屋がタブレットで星図を出し、オリオン座を見ていただき確認したところ  
オリオン座三つ星と小三つ星と $\eta$ の部分であることが確認できた。

### 「ゴントロウボシ」について

明け方や夕方に見える星について北尾氏が問われた。

W「うちのほうではなんですか、5月に宵の明星の金星よりも別に金星の後、木星が良く  
輝くんです。それをゴントロウボシというんです」

K「ゴントロウボシ？」

W「そのゴントロウボシ、わたしが想像するにですね、ゴントロウという御方がこの5月頃  
に野良仕事にかまけてから、こう星の灯りで仕事を…実質的にできるわけではないんで  
すけどね。日が暮れても野良仕事をやめずに続けていたからゴントロウボシ、木星のこと  
ですね。5月頃に、あの、宵の明星のあとに大きく輝くんです、5月頃に」

K「宵の明星のあとに？大きく輝く？5月頃に？」

話者が木星と断言したことが疑問だったが、北尾氏は誘導尋問にならないよう、また  
否定的な会話とならないように注意しながら、確認をすすめられた。

W「そうそう。大きく輝く星。うちの方ではほとんど旧暦の5月に麦刈りをやっていた」

K「その季節に。忙しい麦刈りの時期に」

W「家に帰らずに、ずっぷりとっくり暮れるまでやっていた（麦刈りを）。明日が雨という  
ような特別なときには我々もやらされたものですよ」

K「宵の明星がしずんで、ゴントロウボシというのはまだ輝いている？」

W「そうですそうです、宵の明星のあとにこの大きな星が。5月ごろに真上にある。  
ですから田植え唄にもそういうふうなのが昔の屋号で上の部屋という。今の上の部屋  
でなく昔のほんとうの上の部屋というのがわずかに田んぼがあったんでしょね」

K「ゴントロウボシがでてくる？」

W「そのうちの田植えというのがこの、あまり田んぼはひろくないのに陽がとっぷり暮れ  
ても、田植えが済まなかったという。ですから、『上のへやの田植えには、二言まったく  
行（ゆ）くまいぞ。七つ止めかとおもうたらゴントロウボシをおがませた』というこうい  
う文句があるんですね。それがうちの田植え唄に歌われていたらしいです。田植え唄の元  
唄というのが本当はあるんですが。元唄だけでは文句が足りないというので島ではいろ  
いろ作っては歌っていたんですね」

K「聞かせてもらっても？」

W「♪やーれ しろもよーい なえもよーい このたにや こーめがせんごくぞう  
せんごくごめならまいたまきだね まんごくできたらよめとろうに～これが元唄です

ね。『万石できたら嫁を取ろうに』という。その歌ばかりではあまり早乙女さんの手が動かないってんで女の腰まわりの歌のほうがよく出ていたんですね」

K「ゴンタロウボシも出てくる？」

W「ゴンタロウボシはいまの節でやってみましょうかね。♪やーれ、うーえのへーやの田—  
植えに—は 二言全くゆくまい—ぞ— ななつやめかとおもうたら—ば ゴンタロウ  
ボシをおがませ—た あんまりやったことないので…もう一度やってみましょうか」

W「ああいう風に…言葉はいまあなた方にわかりやすいように歌わしていただいたけど。  
『ゴンタロウボシ』を『ゴンタロウボシヨ』をと発音してたんですよ」

K「やれ、上のへやの…？」

W「上のへやの田植えには、二言…二度と再び行くまいぞ、ですね」

K「上とは山の上？」

W「いや、上というのは屋号でそれがマツモト。うちに七件かぶ八件かぶといわれているニ  
シヤマとかイシマルとかマツモトとかコジョウとか。マツモトの総本家が上。上下の上。  
総本家のへや（部谷？）になるから『うえのへや』」

K「そのひとの田んぼにはいかないということ？」

W「田植えには…七つ…午後4時の事ですね。午後12時が九つ、八つが2時。午後4時頃  
には終わるか。思ったら、ゴンタロウボシが見えるまで…ずんぐり暮れる午後7時す  
ぎまでかからされた、だから行くまいと」

K「確かに5月くらいに明るい星が見えますね」

W「あなたがたは見られたことはないですか？」

K「あります」

W「あれをうちのほうではゴンタロウボシと。5月、夏の初めころに明るく輝く。あれが  
木星だということも知らずにうちのほうではゴンタロウさんがいつもその星が輝くま  
で仕事をしていたから、ゴンタロウボシとうちのほうでは渾名がついたんでしょうね」

K「ゴンタロウボシにほかの呼び名は？」

A「ないですね。ですから木星だということも、わたしもついこの数年前頃になぜあの星が  
ゴンタロウボシなのか、なんという星なのかも調べずにわからずに聞き流していたの  
ですが、どうしても、そのゴンタロウボシというのがどういう星なのかと、星座の本をち  
らっとみて、あれがああ、木星だなとわかったくらいで。唄は若い頃からずっと聞き流  
していたから」

木星というのは、A氏の後の知識から定めたものらしく、見える季節・方向からうしかい座  
のアルクトゥールスの可能性がある」と北尾氏も推測していたようだが、慎重に確認を  
取られていた。

K「ムギボシというひとはいなかった？ 麦を刈るころに見えたから」

A「うちのほうでそれはいわなかったですね。ゴントロウボシ。仰る通り5月の麦の取入れの頃にありますが。うちのほうではそれをゴントロウボシ。」

古屋より「明るい星で色はわかりましたか？」と確認すると、

A「色というのが…ごくごく明るく輝いて。花火が明るく輝いてマグネシウムを燃やしてま  
ず青く光り輝くような…木星はね。わたしの乏しい知識からいうと質量はかなり軽いとい  
うか低いように…」

星の色は表現が難しく、一般にアルクトゥールスのオレンジ色を「青く光り輝くような」と表現していたのは他のものと混同したのだろうか、しかし花火が明るく輝いてという比喩にはアルクトゥールスのオレンジ色を思わせるものがあった。

### 流れ星の伝承

流れ星に関するいわれを聞くと

A「流れ星やなんかはあまりないですが、流れ星がながれてはじめてからきえるまでに「ジ  
ソロバンジソロバン」と言うのを唱えたら…字算盤、字と算盤と。が上達するんだとい  
う言い伝えがあってジソロバンジソロバンと言われたものですよ」

古屋が「それは何回唱えるんですか？」と確認すると

A「3回以上。流れ星が消えないうちに3回以上唱えると必ず字算盤が上達する。読み書き算盤の時代のときから。流れ星が消えないうちに。聞かされたことがある。子どものころ体験がある」

### スマルまんぞくはやよはななつ…

前回、北尾氏が調査された際には音声のみしか記録できなかったB氏（昭和6年生まれ）の口説きの映像記録を行なった。

B「まんぞくていうのは真上ってことですよ

K「すまるまんぞくよはななつ」

B「はやよはななつ。すまるまんぞくはやよはななつ、星が真上に来た時は七つっていう時間で。あたしはその口説きのことはよう知らんのですけどね、すまるまんぞくはやよはななつ、かみはひのしやもよぎのかやに、っていうんじゃないかと森作さんは知っておられたでしょ」

K「前、空は広いのに？」

B「海は広いのにエビの腰やかごんだ、ってね」

K「海の広いのにエビの腰やかごんだ？」

B「家の広いのにとつとつかつかがごじょごじょってね。

ひとところにかたまっちょるってことを言うんでしょね」

B「♪すまるまんぞく はやよはななつ てんのひろいのに すまるぼしやごじょごじょ  
♪海の広いのに えびのこしゃかごんだ 家のひろいのにとっととかがが  
ごじょごじょ」

## 2・岡山県岡山市南区小串



北尾氏の未調査地域である小串で星名伝承の調査を試みたが、漁港も減り漁師がほとんどいなくなっていた。港近くの鉄工所で作業をしている人に声をかけると、小串地域には漁師は高齢で辞めてしまいもういないとのこと。偶然この人の父親が80歳を超える元漁師であった。定置網と底引き網での漁がメインだったとのこと。今は海苔養殖だけになっていると教えてくれた。北尾氏は星名伝承を伝えている可能性は低いと判断し、小串での調査は終了。バスの本数と時間制限もあり次の調査地である下津井へ向かった。(写真：小串の港)

## 3・岡山県倉敷市下津井5丁目（大室漁港）

北尾氏の未調査地域である大室漁港の調査を実施した。港に人影はなかったが、声をかけた地元の人の紹介でC氏宅を訪問。ご本人（昭和12年生まれ）は7代目、後継のご子息で8代目と地域では最も古い漁師の家とのこと。

(写真：下津井5丁目の港を歩く北尾氏)



### 方角の目標だったヨアケボシ

漁のメインはタコツボ漁、手漕ぎの船で四国近くまで行ったこともあるが基本は瀬戸内での操業とのこと、星の名前は親や祖父から聞いたような気もするが覚えていない、ヨアケボシ(金星)の記憶がいちばん強いと話されていた。

K「星はヨアケボシ以外はなかった？」

C「ようけ聞いとらん…いや聞いとったけど60、70年たったらもう記憶ない。

ようけあるスマルボシはきいたな。」

K「スマルボシいいました？」

C「4、5こ6つくらいぼーっとかたまって。それは聞いた。言い寄った。

ヨアケボシが一番記憶ある。スマルはどんな使い方したかはわからん。子どものころに聞いたから」

(風の音で聞き取り不明)

C「漁師じゃったら手島の方へ底引きで行って手漕ぎで帰ると春は濃霧で前が見えない

ときがある。親父は、スマルボシやヨアケボシ見て、うちはここにある。こっちに帰ったらここへ帰れる。ヨアケボシは東だから。濃霧は下も前も見えん。まわりに船もそんなにない。スマル見たりヨアケボシ見て帰る。近くなったら自分のカンで。ここで帰るかとおもったら西のコウムロ（高室）のほうにいたり。そしたら岸壁沿いで戻れる。レーダーもない時代だったから星を見て。三べんくらいあったか。子どもに舳先立たせて(山が)見えたら声出せと（言われた）。」

ヨアケボシ（金星）もスマル（おうし座プレアデス星団）も時刻を知る目当てとして語られることが多いがここではヨアケボシが港へ帰るための方角を知る目印として語られていた。

## おわりに：調査記録を元にした分析・考察

### 1. 星の俚謡

「口説き」は本来、平曲や謡曲で登場人物の悲哀を歌う演出であったとされる。近世になり祭文や歌念仏、説教などの口承文芸の演出も加わり、長唄や音頭など各地の民謡も加わって多様化、野島の「口説き」は盆踊りに歌う「踊り口説き」のひとつであると考えられる。盆踊りは古来、祖霊を迎えるためのものだけでなく、娯楽の少なかった時代の大きな娯楽であり、男女の出会いとなった「歌垣」の性格も持ち合わせていた。話者のA氏によれば野島では盆の時期に朝まで行われ、小さな島の中で三カ所で盛大におこなわれたという。謡い手も多く唄も様々、オリジナルもつくられたというが、その多様性のなかで星を歌うものがあったことは注目したい。またA氏は歌ったことはないとする「家は広いのに とっととかがが ごじょごじょ」というくだりが、女性であるB氏が歌い継いでいるのも興味深い。

「(女性で) 口説きをする人もいたが声の通りやら物怖じやらで滅多にやらなかった。

マイクもない時代だったので長時間口説くのは体力勝負だった」

「口説きは文字の通り異性を口説く、ということもあり昔は一口説き下手では嫁さんがもらえないと言われてた」

男性と女性という立場の違いから口説きの内容も変わっていった…とするには調査不足だが、当時置かれていた女性の立場ならではののおおらかさや多様性が歌詞の中にこめられていたのかもしれない。

### 2・瀬戸内の漁師にとっての星

山口と岡山での調査では、方角を知るために北極星を目当てにしている例と目当てにしていな例を採取することができた。

北尾氏の長年の調査記録から「北極星（ネノホシ）」を伝える例は全国各地に残っていることがわかる。「(ほぼ)動かぬ星」「いつでもそこにある」ことから方角の目印とされていることが多い。これまで、瀬戸内では漁をする海域が限られること、周辺に島が多いことから

島などの地形を目当てにできるため星を目標にすることは少ないと言われてきた。瀬戸内の和名は野尻抱影氏の『日本星名辞典』（東京堂出版・1973年）、桑原昭二氏『星の和名伝説集』（六月社・1963年）などに掲載されているが、北尾氏の調査から新たな和名が採取され、氏の先行研究『瀬戸内海一星と暮らした人びと』（2013年）では、今も伝えられている和名だけでなくさらに新たな和名や伝承も採取されるに至っている。その中で瀬戸内の特徴と感ぜさせられたのは「方角を知るために使用する星は北極星である」とは限らないことである。野島では航程に北極星をつかっていたが、下津井ではヨアケボシ（明けの明星）を指標としていた。周辺の島が見えなくなる濃霧が発生する季節には星を見て東の方位を知っていたことになる。今回は採取することはなかったが、りゅうこつ座カノーパスが、瀬戸内の各地域で見える方向（南）の地名や島、山の名を付けて呼ばれていた（非常に限られた地域での名前となる）ように、瀬戸内という特殊な海域での古人の知恵と言えらるだろう。

### 3・今後の研究への発展と課題

人間が星の存在を認知する。  
長年の経験をもって規則性を見つけることで星を見ることを生活に取り入れる。  
やがてその星には名前が付けられ後の世代へと伝えられていく。  
日本の星の名前（和名）は上記のようなプロセスを経て各地で伝承されてきた。  
その土地の自然環境や生活の違い、宗教、文化など形成に影響する因子は様々だが瀬戸内海とその沿岸地域は他の地域とは違う独自の豊かな土壌を持つ。  
先達の調査研究によって多くの成果が挙げられているが、その後の北尾氏の調査によって新たな和名が見つかることから、まだ未発見の和名が残る可能性が残る地域と言えるだろう。星を認知し文化が伝承されていく過程を調査研究していく上で瀬戸内海とその沿岸地域は今後も重要な場所であると考えられる。

<話者名一覧表・・・個人情報のため取り扱いに注意>

- A氏：西山森作さん（昭和7年生）野島出身  
山口県防府市野島347
- B氏：西山ミサエさん（昭和6年生）野島出身  
山口県防府市野島539
- C氏：難波肇さん（昭和12年生）下津井出身  
岡山県倉敷市下津井5丁目-5-48